

情報化社会における「生きる力」と「問題解決力」の概念

斉藤 浩一 *

情報化時代の現代、子どもも大人も、自身がどう生きたいか、どうありたいか、どのような状況なのか、目まぐるしいために自分と直面できない事態が生じている。その中で「問題解決力」とはどのようなものか、氾濫する情報の中で問題をどのように捉え、どのように解決するかを考える必要がある。本稿では、新学習指導要領の中で「生きる力」がどのように捉えられているかを明らかにする。つぎに、その「生きる力」が発揮されうる情報化社会の問題を明確にする。さらに情報化社会で必要な「問題解決力」を提示する。おわりに、以上を踏まえて、情報化社会で必要な「問題解決力」を育成するための提言を行うものである。

1. はじめに

平成14年度から実施された新学習指導要領には、「ゆとり」の中で自ら学び自ら考える力としての「生きる力」の育成を基本とし、さまざまな施策が取られ始めている。その骨子は、教育内容の厳選と基礎・基本の徹底、一人ひとりの個性、豊かな人間性とたくましい体、「総合的な学習の時間」、完全学校週5日制の導入などがある⁽¹⁾。

特に「総合的な学習の時間」のねらいは、①自ら課題を見付け、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、よりよく問題を解決する資質や能力を育てること、②学び方やものの考え方を身に付け、問題の解決や探求活動に主体的、創造的に取り組む態度を育て、自己の生き方を考えることができるようにする等が挙げられている。例えば、国際理解、情報、環境、福祉、健康などの横断的・総合的な課題、児童・生徒の興味・関心に基づく課題、地域や学校の特色に応じた課題などについて学習活動を展開するとある⁽²⁾。

以上の学習指導要領の内容には、基本的問題が指摘できうる。

「ゆとり」の中であるとあるが、教育内容の厳選と基礎・基本の徹底、完全学校週5日制の導入が子ども達に「ゆとり」をもたらすものとして機能しうるかという疑問である。例えば、算数の円周率は3.14が3に改められ単純化されたが、基本的に理解が十分に行われるとは言えない。また中学校では週5日制のもとで教育内容が精選されたが、受験制度は改善されてはいない。高校受験を考えると学校は英語や数学など受験科目を確保せねばならず、運動会や修学旅行などの学校行事や学級活動（ホームルーム）や道德教育にしわ寄せがくることが現実に入りうる。また宿題も多くなった感がある。

つまり依然として大学入試の弊害とも呼ぶべき「学校歴社会」があり、それらに入学できうる一部の国立大学附属高校や私立高校さらに名門の公立高校に競争が偏り、却って進学熱により「ゆとり」を無くしているとも言える。その結果子ども達は塾や予備校に通う生活をせざるを得なくなっ

*東京情報大学総合情報学部経営情報学科

た。

学校も子ども達も「ゆとり教育」の下で、却って忙しくなったとも言える。その結果、子ども達の友人関係や遊びにも影響が出ている。塾や宿題は子ども達が集団で遊ぶ機会を少なくしている。また孤立化した子どもは、独りでもできるゲームや携帯電話、パソコンに向かう機会が多くなった。

テレビゲームには、バーチャル化した恋愛や友情をテーマにした「ロールプレイング」もあり、実際の恋愛をせず疑似恋愛の中で昂奮し、満足しているかのようにさえ見える。

また高校生に到っては、携帯電話によるメールを行い、それを人間関係の拠り所になっているようにさえ見える。もちろんメールは文字による情報の交換であり、文字は表情や声の調子のない無機質な一面を有する。それによって受け手は、書かれた文字から想像することにより自身の感情を投影し、無意識の情動を膨らませ、行動を制御できなくなる可能性もある。携帯電話の出会い系サイトで知り合い、メールの中の疑似恋愛の果てに、20代前半の若者が主婦を殺傷するという事件も起きた。

情報化社会の現代、子どもも大人も、自身がどう生きたいか、どうありたいか、どのような状況なのか、目まぐるしいために自分と直面できない事態が生じていると言えまいか。その中での「問題解決力」とはどのようなものか、氾濫する情報の中で問題をどのように捉え、どのように解決するかを考える必要がある。

本稿では、まず新学習指導要領の中で「生きる力」がどのように捉えられているかを明らかにする。つぎに、その「生きる力」が発揮されうる情報化社会の問題を明確にする。さらに、情報化社会に必要な「問題解決力」を提示する。おわりに、以上を踏まえて、情報化社会に必要な「問題解決力」を育成するための具体的提言を試みるものである。

2. 新学習指導要領と「生きる力」

事実、道徳教育も「生きる力」を育成する趣旨のもと、その基礎・基本を充実させることが謳われている。ここでの「生きる力」とは、「変化の激しい社会において、いかなる場面でも他人と協調しつつ自律的に社会生活を送れるようになるために必要な、人間としての実践的な力であり、豊かな人間性を重要な要素とする」と言われる⁽³⁾。ここでの子どもたちに必要とされる「生きる力」の核となる豊かな人間性とは、

- a 美しいものや自然に感動する心などのやわらかな感性
- b 正義感や公正さを重んじる心
- c 生命を大切にし、人権を尊重する心などの基本的な倫理観
- d 他人を思いやる心や社会貢献の精神
- e 自立心、自己抑制力、責任感
- f 他者との共生や異質なもののへの寛容

などの感性や道徳的価値を大切にすると捉えられる。

さらに、道徳性の発達を促すために道徳教育をどのように捉えるか、向上心や思いやり、公德心などの道徳的価値を内面で統合した道徳性を発達する教育的留意事項をつぎのように述べている。

ア よりよく生きる力を引き出す

よりよく生きる力の自覚は、幼児期から可能である。すなわち、快、不快の感情が認識できれば、それを基準にして、行ってよいことと悪いことに気付く。快の感情をもたらし行為ができるのは、

よりよく生きようとする力があるからである。成長するにつれ、理性や内省する力などが加わり、内面的・共感的な道徳的心情を発達させ、自らよりよく生きる力を伸ばしていくことができる。

イ かかわりを豊かにする

道徳性は、人間社会における様々なかかわりを通して発達する。こうした人間関係の広がりの中で、大切にし尊重する人々が次第に拡大し、自分の好き嫌いや身内や仲間であるかないかといった意識を越えて、多くの人々への触れ合いの輪は広がり、すべての人へそして生命あるすべてのものへと広がっていく過程を道徳性の発達と捉えることができる。

以上に挙げた内面への洞察と他者との関わりは、切り離されるものではない。豊かな関わりとは、内面の快や不快の感情を開示することによって生れる。また、気の置けない人間関係の中でこそ快や不快を共感し、快は倍にし、不快を半分にすると言った価値が生み出されるのである。

ウ 道徳的価値の自覚を深める

徳性は道徳的価値の自覚によって深められるとする。それは、基本的に他律から自律の方向性、主観的見方から客観的見方、一面的から多面的、さらに、相手のことを考え思う能力、自分自身を見つめる能力、感性や情操の等の発達、社会的な経験や実行能力、役割や期待の自覚等と関係するものとされる。

これらを心理、行動の面から見ると、内的な情報探索を豊かにすることと、それを発進し共有するシステムを形成する自覚と能力、さらに役割、期待の自覚と実行能力の必要性を訴えていると解釈できる。その際重要なのは個人の内面はあくまで個人のものであり、他者とのズレを認知することではないか。そして、他者とのすり合わせによってそれをいかに構造化していけるかが問題解決力であり、創造性に繋がると考えられよう。

今後の社会で生きる力において、最も必要なものは「問題解決力」と「創造性」と言っている言い過ぎであろうか。さらに、それらを身に付けるために、完全週5日制の実施であり、「総合的な学習の時間」と言える。

3. 我が国における情報化社会の問題ーインターネットの普及とデジタルデバイド

前にあげた「総合的な学習の時間」は、子ども達が課題について、情報を収集し解決する過程を通じて問題解決力を養うための時間と言える。その情報収集には、当然パソコンによるインターネットの利用が根底に置かれていると言えよう。

実際、現在の我が国の学校において、コンピュータが設置されていない校舎はないと言ってよいほど普及されてはいる。しかし、1台のパソコンを何名が使用するかという点については、合衆国のパソコン1台に9人に比較して、決して高くない現状があるのではないか。例えば日本では、生徒のためにパソコン教室はあるものの、1部屋40台が限度であり、授業中は1人が1つのパソコン使用している現状になっている。すると、1台に換算すると14～5名はゆうに超える平均台数となる可能性がある。

小学校では、パソコンのワープロソフトを使用して名刺を作成したり、必要な情報をインターネットに検索するという実習を行う。しかし、パソコンがあり、実際保護者が使用している家庭ならば、放課後、その復習をしたり、自分で情報検索する習慣や技術は身に付けられる。反対に、家庭になれば学校だけの週2時間の実習が限度であり、自由に使いこなすようにはなかなかない。そこに、デジタルデバイド（情報格差）が生じている可能性は十分にある。つまり、家庭でのパソ

コン普及と子どもの情報の獲得に差が生じるのである。ある事例で、総合的な学習の時間を利用し、「住んでいる県がどのような稲を作っているか」つまり「日常食べているごはんは何か」という課題を設定した場合クラスの中に班を作り、学習を進める。その際、問題は稲の品種や値段、作られている県を調べる作業がある児童に偏ってしまう。どういう子かと言えば、家にパソコンがあり、家族はインターネットを利用して情報検索し、プリントできるといった条件を有する者となる。

上の事例は実際に存在するが、パソコンが普及したと言っても、まだまだ家庭環境に差があるのは事実と言わねばならない。そのために、中学校、高校に「情報」の単元が設置されている。しかし、所得、学歴によってインターネット、コンピュータ世帯保有率に差がある。まだまだ格差があることは認めざるを得ない現実である。実際、アメリカでは、コンピュータを使った教育化が進んでいると言われる。しかし、日本ではその試みが始まったばかりと言えよう。

今後、少子化の影響で高学歴化が進行する。しかし、その陰に学校から落ちこぼれ、情報（ネットワーク）からこぼれ落ちる人々が出て来る。それが大きな所得格差を生む可能性は十二分に存在する。

それを防ぐためには、コンピュータの普及を急ぎ、授業の内容を補完するような教材の情報化を急がねばならない。あるA市では、不登校の生徒に教育委員会が無料でコンピュータを貸し出し、インターネットによって、学校の情報を発信、意見を言えるようにしていると聞いている。いずれは、すべての教材の授業をインターネットで受信し、不登校であっても、学習できるシステムが作られるであろう。

パソコンやインターネットが、電化製品（テレビや冷蔵庫）のように時間差によって普及していくとは考えられない。より学校にパソコンを充実し、さらに学校に來れない者であれば、家庭に供与するくらいのサービスをしなければならぬだろう。

それではなければ、国民全体の問題解決力は向上しない。さらに、現在の我が国における経済の低迷化が製造業の海外輸出化による失業率の増加に起因するならば、情報を集め、課題解決のために役立つインターネットの普及とデバйд解消が経済成長率のカギとなる。たとえ高校や大学を出ていなくても、パソコンを自由に操り、インターネットの情報収集によって問題解決する力は、実社会で十分に「生きる力」になると言えよう。

さらに情報を収集する環境が整ったとしても、十分とは言えない。子どもに「情報をいかに論理的に構成するか」という能力が必要となる。それは、問題をどのように捉え、どのように解決するか。まさに「問題解決力」とは何かが問題になる。

4. 情報化社会で必要な生きる力としての「問題解決力」

不景気の時代だから「問題解決力」が必要であると言われる。しかし「問題解決力」とはどのようなものであり、どうしたら身に付けることをできるかが課題となる。

まず「問題」とは何か。ここでは「問題」を他の人との間における物の見方のズレと定義する。例えば「葬式でみんなが悲しんでいるのに一人だけ笑っている」「サッカーをしている時、グローブとバットを持って立っている」と言うように、問題とは、個人の間での言葉、考え、行動などのズレと考えられる。

さらに、その問題はどのように解決されるのか。親しい人ならなぜそうしているかを聞くことによって解消される。しかし、コミュニケーションの不備がある場合には、さらなる問題を生む。仲

が悪ければ勝手に解釈し、より陰悪になるのと同じと言えよう。

つまり問題とは、ズレを解消できれば解決できる。そのためには声に出してどこがどうズレているか言わなければならない。

世の中には小さい問題から大きな問題まである。最近の世界を見れば、アメリカとイラクとの戦争は問題と言えよう。なぜならその際「アメリカがイラクを核兵器や生物兵器などを持っているから危険だとして攻撃した、必然だった」「イヤ、どんな理由があるにしろ戦争はいけない」、この二つの意見には明確なズレがある。日本はどのような意見と態度を持つべきなのか。二つの意見のズレは解消されないまま、終戦を迎えてしまった。

さらに経済の問題でも「とにかく不良債権（価値のない貸し）を処理できないなら、役員や銀行員の給料をカットすべきだ、それでもなくなならないなら潰れてもしょうがない」という声と「いやそんなことをしたら、失業者が出て大変なことになる、税金を使ってでもつぶしてはならない」という2つの声の間にも確かにズレがある。しかし難しい点はどちらも正論であり、結果どうなるか分からないことである。

この問題を解決するためには、強い意志と多くの知識が必要と考えられる。しかし、まず必要なのは、私たち庶民が誰か（例えば、政治家）に責任を転嫁する行動様式を吟味すること、人から言われて何かをすることに慣れている態度の転換と言えまいか。その結果問題に敏感になり、自身で解決する意思が必要となる。

我々は何かを見たり聞いたりして、気持ちが動く。面白い話には笑い、悲しい話には涙がでる。楽しい、充実している、ワクワクするなどの快の感情と怒り（イライラ、ムカつく）や不安（ハラハラ、緊張）、抑うつ（悲しい、空しい、落ち込む、暗い）等の不快の感情を感じられたなら、そこには問題とそれを解決することによって生じる創造が見出される。なぜなら、我々一人ひとり、それらが違うからであり、言葉で表現することによってズレが明確になる。つまり問題の構造が明確になり、行動指針が得られるからに他ならない。

問題解決力には、「問題に気づく感受性」「それを表現する力」「ズレを正しく判断して構造として構築する力」「ズレをそのまま受け容れる忍耐力や自信」等が挙げられる。

それがどのように身に着くのか。対象が子どもであるならば、一つには何か自信を持てるものを持つことが重要となろう。とにかく自分らしさを持てる自信が意味を有する。何かに打ち込むことによって、構造としての構築力や忍耐力、自信が身に着くと考えられるからである。

さらに最も大切なのは「自分が今、ここでどのように感じているか」を大切にすることである。例えば、悲しい、うれしい、満足、イライラ、安心、落ち込む、うらやましい等を感じ、互いに表現する。それを共感することによって、意欲と文化が形成される。

ある大きな会社の経営者が「最近の新入社員は、言われたことはできるのに、自分で仕事を見つけない、解決することがまったくできない」と嘆いているという話を聞く。大きな会社なので、新入社員の学歴は一流大学卒となる。しかし、実際社会では役に立たないと言われる。彼らは、大きな銀行でもリストラが起こり、倒産して失業する時代に、これからどう生きていけばよいのかが分からないのではないだろうか。

さらに、現在の日本には目標になる国は見当たらない。世界でもっとも物価が高く、文字を読めない文盲率も一番低く、医療制度も他と見劣りはしない。しかし、混沌を生み出すのは、住みやすさや幸福度の希薄さであり、これからは落ちるだけだというような絶望感等であろう。結果、自殺率も高まりつつある。

実際、今日本が手本にできる国が見当たらない。それと関係しているのか、自分で考える人があまりいないとさえ指摘されうる。世界にお手本がない以上、とにかく分かりきったことをガンバルだけでは済まされない。そこで必要なのが「問題解決力」と言えよう。今後の社会で生きていくためには、とにかく答えを出すのでは駄目であり、なぜこのような答えを出さなければならないのか、どのような社会や会社や家庭のあり方を示せなければならない。どうありたいか、そのためにどう生きていくかが必要となる。それらの要件が「問題解決力」を生むと考えられる。

このような状況で、言われたことをまじめにやるだけの人はこれからの社会では役に立たない、と言ってしまっただけでは言い過ぎであろうか。「問題解決力」を有するためには、自分が何をしたいか、さらにどうなっていきたいかを考えなければならない。

さらにそのためには、「自分が何をできるか」をしっかり持つ必要がある。コンピュータなら、とにかく動かせるのではなく、動かす仕組みまで知り、動かなければ動かせる状態にできる。英語もただ訳せるだけではなく、自分達の意思をしっかり伝えるようにアレンジできなければならない。歌もただ歌えるのではなく、聞く側に立って気持ち良くさせたり、癒せたりしなければならない。クルマも運転できるだけでなく、故障により動かなくなるとき修理できる。そのような能力が必要となろう。ものの仕組みと原理を理解するために、知識の基礎・基本と言える。

モノを売るのでも、相手が何を欲しいのか考え、値段やその後の修理（メンテナンス）までできなければならない。一番大切なのは、とにかくみんながどのように感じ何をしてあげられるかを測る洞察力つまり想像する力である。これは「して欲しいことをしてあげる力」と言い換えることができる。

以上のように、ズレを認知する感受性、自身、相手の気持ちを想像する洞察力、情報を整理する論理等が問題解決力の要素と言えよう。

今後の情報化社会で強く求められる生きる力は、今、とにかく一つでもできるものを作り、必要に応じて増やして行く必要性を認知する感受性と、ズレを認知し解決する「問題解決力」であると結論づけられる。そのために、子どもが立ち止まり、今何がしたいか、どういう大人になりたいか等を考えるのは、それらを育成する基本的な原理である。

5. おわりに―「生きる力」を育成する教育に関する提言

道徳の内容構成はつぎの4つに集約される⁽⁴⁾。

- ① 主として自分自身に関すること。
基本的な生活習慣、粘り強さ、勇気、夢や個性
- ② 主として他の人とのかかわりに関すること。
相手への思いやり、助け合い、そして感謝する心の大切さ
- ③ 主として自然や崇高なものとのかかわりに関すること。
自然を大切にすること、生命の尊さを感じる心、気高いものに感動する心
- ④ 主として集団や社会とのかかわりに関すること。
集団のルール、役割や責任、集団や社会に親しむ心

これを見ると、①、②、④については、自身の感受性と表現力、洞察力、共感する能力情報を論理的に構成する力が挙げられる。つまり道徳性の発達とは、社会的問題解決能力の発達と同義であると結論づけられまいか。

今後ますます社会の情報化が進み、インターネットが普及する。そこでは内面を社会的に見つめ、実行する力としての社会的問題解決能力が個人を幸福にすることに繋がり、社会に繁栄をもたらすという希望が持てる。

逆に、社会的問題解決能力の育成は、学生を含めた子ども達に快・不快などを見つめる機会を設けて、自律的かつ多面的、社会的、動機を含めた過程を大切に、かつ実行し、感受性や表現力、共感的能力を身につけさせるようなカリキュラムが必要となろう。

例えば、小学校の段階であれば、何が正しいか、「正しい」「たぶん正しい」「たぶん間違っている」「間違っている」という概念を作り、子ども達にとにかく判断させて、その理由を表現させる。その後もう一度判断させるという体験により、自分の判断力を内省させ、深める実践ができる。

そのような実践は実際に存在する。ある小学校6年生の道徳の公開授業によって行われている。教室の机や椅子を隅に寄せ、広いスペースを作る。その四隅に上の4つの項目が書かれた紙が張ってある。先生はある項目を読み上げる。例えば「家での宿題は多い方がよい」と言えば、子ども達はそれぞれの判断で四隅に別れる。先生は、なぜかを子ども達に発表させる。そして、もう一度選択するのである。ここでの「宿題は多い方がよい」という命題に正解はない。子どもたちの主観があるだけである。しかし、自分が判断し、他者の判断を見するという行為は自身を客観的に見ることが可能となる。他者と自身のズレを見る機会は小学校段階から可能である。

さらに、大学生でもこのような教育実践は可能である。実際どのようにこれらの能力を身に付けさせるのか、大学での基礎演習の実践を一例として提示したい。例えば、「なぜこの大学に進学したか」、他者のデータを提示し、自身とのズレを見るという行為は「問題解決力」を育成する。

2002年度基礎ゼミ演習 No.2 模範レポート

下の表を見て、自分を見直し、これからの自分について考える。

大学志望動機 ⁽²⁾ (2002年 352名対象)	まったくない (1点)	いくらかある (2点)	かなりある (3点)	とてもある (4点)	平均 (標準偏差)
遊びたかった	18.5%	35.8%	27.8%	17.9%	2.45 (.99)
自由な時間があると思った	16.2%	23.3%	38.1%	49.4%	2.67 (1.01)
異性の友人(恋人)を作りたい	13.1%	28.4%	26.7%	31.8%	2.78 (1.04)
友達を作りたい	5.7%	20.7%	34.1%	39.5%	3.08 (.91)
趣味、仲間作り—サークル活動	10.8%	24.1%	29.3%	35.8%	2.90 (1.01)
のんびり生活できるから	31.0%	31.5%	27.0%	10.5%	2.17 (.99)

レポート

上の表を見て、あなたはどのような学生生活を送りたいですか。

大学生活が始まって約2ヶ月が経とうとしている。私たちは、これからの大学生活をどのように送るべきなのだろうか。

大学と言えば当然ながら、興味のある分野を学び、より詳しく追求していくというように考えられる。しかしながら、一方でたくさんの仲間と出会い、さらに、サークル活動などを通して、先輩や後輩と触れ合う機会が増える。それらのことで、人間としての関わりと自分自身を深めることができるのではないか。

実際、上の表を見ても分かるように、友達作りやサークル活動に興味を持ち、それを目指して入学してきた人は非常に多い。人間関係を深めるということは、自分自身と全く違った何かを持った相手と接することによって得られる。そこで、自分にはないものを吸収し、さらに自分自身を成長させることができよう。よって、人間関係を深めたいと考える人の多くは、根本的な理由に、これらのあるのではないかと考える。

以上のことから、大学での勉強はもっとも大切なことだが、人との関わりを通して学ぶことも多くあると考えられる。よって、人と接する機会をなるべく多く作ることを目標に、これからの大学生活を送って行きたい。

学籍番号 _____ 氏名 女子Aさん。

左の事例は、大学の基礎演習における1年生を対象としたゼミレポートの一例である。

他者と自分の大学への志望動機の「社会性獲得」と名付けられる項目群を見つめることによって、「生きる力」としての「問題解決力」を身に付けることをねらいとして行われた。これらは、決してコンピュータのインターネットでは得られない。同じ境遇の顔を合わせた人間同士で、自身の内面の情報を開示し、他者の感情を受容して練られていくものである。

以上、小学生の道德の授業実践と大学生の基礎演習の事例を挙げたが、共通した基本要件は自身を見つける自己探求の姿勢と意欲と考えられる。

情報化時代の現代、子どもも大人も、自身がどう生きたいか、どうありたいか、どのような状況なのか、目まぐるしいために自分と直面する時間と機会を持つことができない。その中で必要な「問題解決力」とはどのようなものかは非常に重要であり、今後も議論する必要があるだろう。

注および引用文献

- (1) 文部省 2000 中学校学習指導要領（平成10年12月）解説－道德編－
- (2) 児島邦宏解説 2000 中学校学習指導要領（平成10年12月）時事通信社
- (3) 文部省 2000 前掲書に同じ
- (4) 文部科学省 2002 中学校 心のノート活用のために

〔付記〕

本稿の一部は、東京情報大学平成14年度共同研究「情報系大学生の心理特性理解と指導、援助技術に関する研究」の一環として行われたものである。

